

目的 添毛織物(別珍)は着用によつて表面性状の変化が視覚的に目立つが、その状態を測定によつて表わすことを試みた。表面の疲労処理としては、着装実験用のスカートによる実際の着装と、ポリリング試験機による処理を行ない、両者の表面性状の変化傾向を対応しながら検討した。

方法 試験布は綿100%の別珍とし、視覚的な目立ちやすさの点も考えて、白と紺の2色を用いた。着装による変化状態は20時間ごとと100時間までを調べ機械的にはICIポリリング試験機により、5000回ごとと20000回までの試料を作って測定した。着装後の全体のスカートの疲労状態、部位別ごとに色、つや、毛羽の変化を視覚と機械により測定した。同様に機械的処理布についても測定し、さらにスカートについては表面性状の変化からくる表面の凹凸、しわ、毛羽のわれなどを観察した。

結果 これらの添毛織物の表面性状の変化は、視覚的には紺色より白色の方が目立ち、着装時間が多くなるにつれ、変化は大きくなる傾向だが、部分によつて疲労ロードのかかり方が異なるのでその変化状態に方向性が出てくることがわかった。毛羽試験の相対毛羽長に対する毛羽数を示す曲線の変化はよこ毛パイルのため、よこ糸に直角に光をあてて測定した場合は、毛羽の重なる確率が小さくなるので、毛羽係数は増し、疲労処理後の変化状態を大きくとらえることができた。ICIポリリング試験機による処理後の毛羽曲線の変化は着装後の曲線の変化と同様な変化傾向を示す。また5000回での変化がすでに着装100時間後の毛羽の変化状態よりも大きい。